

高齢者見守りシステム(那賀町)

助け合いへ信頼構築

暮らしを支える

「受診を勧めても長男もあつた。に拒まれ、認知症の高齢女性と話ができない。どう対応すればいいか」

那賀町相生包括ケアセンター(同町大久保)の雅志さん(44)は、保健師定例会議。町の医療・ケアと一緒に女性宅を訪ねア体制を支える医師や介護福祉士、保健師らが集まり、さまざまな事情で支援が難しい患者への対応策を話し合った。

町内に住む80代の高齢女性は、以前から認知症の疑いが指摘されていた。女性が指摘されていた。生活は大変。でも他人病もあり、薬の服用が欠かれない。にもかかわらず、女性の世話をしている60代の長男は一切の治療を拒んでいた。ネグレクト(介護放棄)の疑い

医師・介護福祉士ら連携

可解にみえた長男の言動。包括ケアセンターの重み、このままでは危険だ。システムは、町内で困っている人々を支えるための。湯浅さんもこの日の対応を情報共有システムで、難しいケースは今後も増え、定期的に男性宅を訪問するようになった。体ミューニティーを維持するの具合や日々の暮らしの困り事を尋ねる湯浅さん、専門スタッフが知恵を出せるので心強い」と信じた。湯浅さんは「情報共有

那賀町は、人口8503人(6月末時点)のうち65歳以上の高齢者が4092人を占める。1人暮らしの高齢者が増加した町社会福祉協議会の職員の駆け付けると、男性助け合いは機能しなくなってきた。高齢者らの生活支援を総合的に話し合



支援が必要な高齢男性に困り事がないか尋ねる湯浅さん(左)＝那賀町内



行方不明の高齢者を捜索する模擬訓練。住民が認知症への理解を深める機会にもなっている＝2月、那賀町の木沢総合防災センター

情報網・訓練に住民参加

1人暮らしや認知症の高齢者の増加が大きな課題となる中、那賀町は県内の6分の1を占める広い面積を限られた人員でカバーするため、ユニークな試みを始めている。町は2015年、町内の高齢者らが行方不明になった際、登録した事業者が不明者の特徴を一斉メールで知らせる情報共有システムを導入した。17年には、地域住民に加入してもらう「SOSネットワーク」もスタートさせた。

逆走する台風12号に備え、三好市に避難情報の発令基準について取材した際、思わず聞き返した。同市山城町では、通常よりかなり早い段階で避難勧告を発令する異例の措置を取ったという内容だった。今回の対応は、西日本豪雨の影響で地盤が緩んでいたため、避難情報を受け、市内で39世帯が避難所に身を寄せた。幸い、予報より雨量は少なかった。市は柔軟な対応を記憶に残しておきたい。

(櫃本恵)